

青年期女子の適応に寄与する保護的要因について : 青年期不安心性と, 特性傾向

著者	西山 薫
雑誌名	人間福祉研究
巻	8
ページ	201-212
発行年	2005-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000386/

青年期女子の適応に寄与する保護的要因について — 青年期不安心性と、特性傾向 —

西 山 薫*

はじめに

本稿では、青年期女子の精神的な適応を保護するような個人要因を考察することを目的とした。まず、青年期女子では、男子に比較してキャリア発達および性役割同一性形成の過程が多様で困難が多く、不安を抱きやすい状態であることを、これまで女子大学生を対象に得られてきた知見をあげて解説する。次に、そのような不安心性の低減に寄与するような特性傾向を検討する。取りあげたのは、認知的特性としての自己効力と性格特性であるプロアクティブパーソナリティである。この2つの特性の先行研究の中から、キャリア選択や自我の発達に関わって得られてきた知見を述べ、2つの特性のどのような特徴が不安心性に対して寄与できるか、その可能性を論じる。これらの考察を通じて青年期女子の適応的生活に貢献する潜在的資質を探ることにする。

I 青年期女子にみられる ネガティブな心理現象

1. 青年期女子の不安感～女子大学生を対象として

青年期女子が男子に比べ不安感が高い、情

緒的に不安定であるという現象は、教育現場や臨床場面で経験的にも指摘されることである。事実、不安測定のために標準化された尺度において、被験者としての女子大学生群は概ね高い数値を示すことが明らかになっている。MA Sでは(大村, 1985; 阿部・高石, 1968等), 日本人のサンプルにおいて中学生から成人にかけて大学生をピークとするなどらかな上昇と下降が見受けられ, また大学生の中でも女子が男子より高い。またS T A Iにおいても同様の結果が得られている。日本版S T A Iによれば, 状態不安, 特性不安ともに大学生は正常成人の平均値より約+1SD程度高い(e.g., 遠山・末広・新里, 1980)。女子大学生では, 標準化の際のデータにおいて状態不安, 特性不安の順に平均値は, 47.4 (SD=10.33, 以下同様), 49.1 (9.81)であったが(中里・水口, 1882), 25歳以上の成人女性では女性全体の平均値が, 36.6 (9.06), 39.1 (9.90)であることが示されている(中里・下仲, 1989; Nakazato & Shimonaka, 1989)。調査時期は異なるが, 女子学生の平均値は成人女子平均値の約+1SDに位置する高さである。大学生の不安については, 具体的な大学生活場面に対する不安を測定した研究結果も得られている。

*北海道浅井学園大学人間福祉学部福祉心理学科

キーワード：不安, 青年期, プロアクティブパーソナリティ, 一般的な自己効力

藤井（1998）は大学生活不安尺度を開発したが、これは大学不適應の対処・予防を目標として大学生活全般における不安を把握しようとするものであった。尺度には日常生活不安、評価不安、大学不適應の3下位尺度が含まれるが、調査では、総得点と、日常生活不安、評価不安の2つの下位尺度得点において、学年差と性差が認められた（Fig. 1）。大学生活における不安は、学年が上がり馴染むほどに低下していき、また女子学生の方が男子学生よりも強く不安を感じているという結果となった（大学不適應では性差、学年差は認められなかった）。日常、教育の場で聞きするような女子大学生の情緒的不安定を不安感から捉えると、確かに数値上の裏付けも得られていることになる。

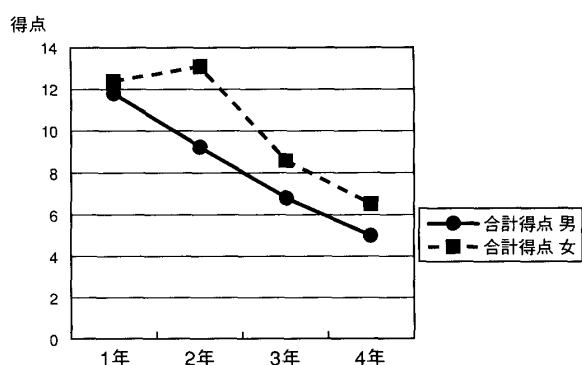


Fig. 1 大学生生活不安(合計得点)の学年差
(藤井, 1998)

2. 青年期女子に特異的な課題とその困難さ

青年期の特に後期は、“こどもから大人”への移行する最終段階としてその後の人生に大きく影響するような選択が多くなされる時期である。Newman & Newman (1984) は、Havighurst と Erikson の発達課題に基づきながら青年期後期の発達課題を①両親からの独立、②性役割同一性、③道徳性の内在

化、④職業選択、としている。その中でも④の職業選択に関しては、その発達を規定する主要な要因が②の性役割同一性と全く同じであることを特筆し、若者の理解には社会、人種を越えて、性役割観、職業（キャリア）選択（注1）という2領域の相互関連性を捉えることが不可欠であるとしている。このNewman & Newman (1984) の指摘を裏づけるような研究の流れをいくつかあげることが出来る。

(1) キャリア選択（career decision）と進路不決断（career indecision）の問題

進路不決断は、進路選択研究では初期から関心を持たれた中心的課題であった。青年期前期から後期の女子においては、男子以上に進路の選択と就職に不安を高め進路決定を躊躇しやすい事態が生じる（e.g., Matui & Onglatco, 1992）。Hackett & Betz (1981) はキャリア発達の領域に初めて自己効力感という概念を導入したが、これは特に若い女性にみられる進路不決断について、そのキャリア発達の理解と分析を図るためであった。性役割に基づく職業分業の考え方、また女性特有に社会から要請される性役割獲得は、女性の進路選択パターンを制限したり選択後の職業行動（とその継続）に大きく影響を及ぼすと想定したのである。進路選択に対する自己効力感（career decision-making self-efficacy: CDMSE）は、職業への関心や価値観、意志決定能力など進路選択を予測する要因に大きく影響を及ぼすことが明らかになった。さらに大学生をサンプルとした調査では、女子大学生の職業に関する自己効力感は男子学生に比べかなり低いということも明らかにされた。しかし女子であっても、進路や

職業について能力に自信があるとかその進路に自身の選択可能性が高いと思える場合には性差が生じにくいとされ、進路選択に関する自己効力が女子大学生のその時期に獲得している性役割観と密接に関連していることがわかる。

(2) 青年期女子の性役割同一性の形成における多様性

性役割同一性は、自己の性役割観と社会から期待される性役割との間で吟味されながらその個人に獲得されていく。伊藤・秋津（1983）は性役割同一性の発達の推移を中学生から成人において検討し、男子と女子の相違を指摘した。「男性性」「女性性」「人間性」という役割の獲得について、男子が女性性を峻別しながら男性性を自己への価値として高めていくのに対し、女子は高校を境に女性性から男性性へと価値を移行し、結果として両方を自己の価値規範として受け入れていくという。つまり女子にとって3つの役割すべてが重要な要素となる。また自己の価値意識と周囲から期待される性役割との間で生じるズレは、男子では加齢と共に徐々に解消されていくのに比べ、女子では逆に高校から大学にかけて大きくなることが示された。このように青年期における女子は、男性性という価値を高く意識せざるをえない中で“自分らしく生きること（人間性）”と“女性らしく生きること（女性性）”をも照合していかなねばならず、性役割同一性を獲得していく過程は青年期男子に比較して葛藤が強いということが理解できる。なお、古くは男性が仕事、女性は家庭という考えや、伝統的職業が男性向けであるという風潮から明らかなように、性別に

よる職業分業が存在してきた。そのため女性のキャリア発達を規定する要因に性役割観を取りあげ検討した研究は当然ながら多い。例えば日本では伊藤（1980）は、女子青年の職経歴選択をその性役割観と、父母の性役割観、父母の養育態度との関連から検討している。

Ⅱ 青年期女子の心理的な適応に影響する要因

このように青年期女子の精神的な不安定さは、単なる過敏さの問題であつたり個々人に特定の状況だけを原因とするものではないことがわかる。この時期の不適応状態が、個人特定の要素の強い神経症的な状態である場合も見受けられる。しかし精神的不安定を呈しながらも、この困難な時期をやがては乗り越えていく女子が多いのも確かである。ある期間、一過性の不適応状態に陥っていても、発達上の課題を通過するひと時として乗り越えられる潜在的な資質を予測することはできないであろうか。

青年期の女子を取りまく背景として、前段ではキャリア発達の困難さと、男子よりも性役割同一性の形成過程が複雑であり、かつそれらが関連しあい不可分であることを述べた。自我の発達途上で内面に目を向けざるをえない状況とともに、社会から規定される枠組みや社会的要請を受ける。青年期男子以上に、女子は対自的にも対外的にも圧迫を強く受けると言ってよい。この状況に対応していくための能力を想定した場合、1つの条件としては、ある程度個人に一貫して備わる性質であることが望まれる。つまり具体的ないく

つかの生活場面や日常起きる個々の課題への対処にとどまらず、この長期のスパンに渡って比較的安定した発現を期待できるものということである。さらにその内容は、例えば明るさ、幸福感などといった感情的情緒的な傾向だけでは不十分であろう。潜在的な資質としては、その個人の意志や判断に影響力を持つような認知的側面と、また行動を方向付ける原動力となる道具的行動的構造をもつことが必要である。たとえば前者にはコントロール可能感、後者では達成欲求や印象管理などをあげることができる。

臨床的な立場から個人を理解し介入と支援をするにあたって、備わる性質に伴いどのような思考パターンが想定されるか、どのような行動様式を期待できるかは重要な手がかりとなるからである。

ここでは、日本における調査研究の結果に基づきながら、認知的特性として「一般的な自己効力」を、性格特性としては「プロアクティブパーソナリティ」に着目して、それぞれに検討を加える。

1. 認知的特性～一般的な自己効力

(1) 一般的な自己効力

I-2 キャリア選択と進路不決断では、進路選択に対する自己効力感(CDMSE)について述べた。自己効力は自分が行動をどの程度うまく遂行できるかという確信であり、CDMSEは「自分がどのくらい首尾よく進路選択を行っていけるか」という確信、自信と説明することができる。自己効力は本来ある特定の課題に対して関与するのであるが(「課題特定の自己効力」)、一方で個々の課題や場面を越え、いくつかの行動に遂行可能

性を見立てるという一般性の水準が想定されている。この「一般的な自己効力」はある意味で性格特性のように安定した機能を持つものであり、対具体的課題にとどまらず、より広範に機能する効力感を期待できることになる。一般的な自己効力に関し、日本でも坂野・東條(1986)、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)等、いくつかの研究があり測定尺度も開発されている。

(2) 一般的自己効力と進路選択に対する自己効力

西山・中野(2002)では、「一般性セルフエフィカシー尺度(General Self-Efficacy scale: GSES)」(坂野・東條, 1986)とCDMSE尺度(浦上, 1995)を用い、自己効力が就職不安とどのように関連するか検討した。なお就職不安の評価尺度は、藤井(1999)により日本人女子大学生を対象に作成された就職不安尺度(Employment Anxiety Scale: EAS)が用いられた。その結果、GSES, CDMSEのいずれもがEASとは中程度の負の相関を示し、自己効力の高さと就職不安の低さという関係が裏づけられている(Table 1)。しかしながら、さらにEASに含まれる3下位因子「就職活動不安」「職業適性不安」「職場不安」との関係を分析したところ、それぞれの自己効力で関連の様相は異なることが明らか

Table 1 GSES, CDMSE と、EAS 総得点および3下位尺度得点の間の相関係数
(西山, 2003)

	GSES	CDMSE
EAS	-.47**	-.51**
就職活動不安	-.37**	-.33**
職業適性不安	-.42**	-.63**
職場不安	-.42**	-.35**

**p<.001

になった（同じく Table 1）。さらに、自己効力を目的変数、就職不安の3因子を説明変数として行った重回帰分析によると、GSESには中～低程度に3つすべての因子が関連しており、CDMSEに対しては職業適性不安1つのみが強く関連している結果となった。これは自己効力の中でも一般的水準を測定するGSESと、いわば課題特定的水準を測定するCDMSEの特質を表すものと解釈できよう。一般的な自己効力は、あらゆる課題特定の自己効力の十分条件ではなく、課題特定の自己効力は、発達と維持のために適切な経験やスキル獲得を必要とする。対象者である女子大学生が、一大学（や学部）を選択し入学を果たすという“専門性の選択関門”通過の経験を持ち、また在学中の学習が専門分野の知識を与え職業的適性と照合する機会をもたらすと考え、進路選択に対する自己効力の中でも職業適性に対する側面が育まれ易く、不安を抑制していることが考えられる。しかしその反面、まだ直接体験や吟味が頻回ではない領域（この対象者では就職活動、現実の職場経験）については自己効力は促進されづらいと言える。一般的な自己効力は広く行動傾向に影響するものであり、行動一般に対して遂行可能感が高い者は、例えば進路選択を考える時期に至っても、その可能感を概ね維持し就職に関連する不安をあまり高めずに過ごしていることが示唆される。限定した分野への目覚ましい効力感ではなくとも、ある一定の高さで行動遂行可能感を期待できるということが出来る。

2. 性格特性～プロアクティブパーソナリティ (proactive personality)

(1) プロアクティブパーソナリティの特徴、および自己効力との関係

プロアクティビティ (proactivity) とは、積極的、主体的に周囲に働きかけていく行動傾向を指している。単に活動性や積極性が高いのではなく、その長所は、刺激への反応（リアクション）としての行動ではなくて、“前対処的”傾向をもつという点である。Bateman & Crant (1993) は一連のプロアクティブ行動様式を特性傾向の一種と捉えてプロアクティブパーソナリティ（以下、PP特性）と呼んだ。典型的なPP特性とは“比較的状况の圧迫に屈せず、そして環境の変化を生み出す人”であり“好機を良く探索し、主導権を発揮、行動を起こしかつ変化がもたらされたと思えるまで頑張り通す” (Bateman & Crant, 1993, p 105) とされている。対極にあるのはいわゆる受動型 (passive) である。“反応型、順応型、環境から規定されるタイプ”、“変化については他人まかせ、取りまく環境に対しては受動的な順応者であり我慢しがちとなる”という表現を対峙させると、PP特性の特質をさらに理解することができる。Bateman & Crant (1993) は、米大学生を対象として17項目のプロアクティブパーソナリティ尺度 (proactive personality scale) を開発した。尺度の妥当性を基準尺度との関係から検討する過程において、いくつかの好ましい特徴を見いだしている。5因子性格検査（以下、Big Five）との間では、外向性 (E) と誠実性 (C) と関係が強く、また達成欲求、支配欲求とも相関関係が確かめられた。またPP特性の高い者は、自主的な地域活動の頻度が高いことや、クラスメイトから評定されたリーダー

シップ度が高いこととよく一致していることも明らかになった。

日本においてPP特性はまだ検討されておらず、西山・中野(2002)および西山(2003)では主体的かつ周囲の圧迫に強いとされるこの特性に注目して、日本人女子大学生におけるPP特性の特徴を分析し考察した。2つの調査研究では初版日本版PPS(JPPS, 16項目)、さらに改訂版のJPPS-15(15項目)が作成された。その過程で得られた結果では、Big FiveにおいてBateman & Crant(1993)と同様にE, Cとの関係が認められ、PP特性は外向的でねばり強い性質が伴うことが確認された。また独自の傾向として、弱いながら調和性(A)との間でも正の相関が認められ、積極的であるけれども周囲と競争したり対決するのではなく周囲との協調性を考慮するような一面もうかがえる。この調和性における結果は日本人の女子大学生においてのみ見られており、独特の傾向ではないかと考えられる。日本版PPSと同時に、比較検討する基準尺度としてGSES, CDMSE, 就職不安尺度(EAS), SDS自己評価式抑うつ性尺度を施行した。PPSと各尺度の相関分析の結果をTable 2に示した。PP特性は一般的な自己効力、および進路選択という課題特定

的な自己効力の両方に中程度の相関を示し、行動遂行可能感と関係することがわかる。しかしPP特性は就職不安とは関係が認められたものの、かなり低い相関となった。これらのことは、高いPP特性は、ある程の高い自信をもち行動していけるのだが、就職に関わる事態についていえばその不安感は低いとは言えないこと、むしろ不安感を伴いながら活動性を発揮している場合も多いことを想像させるものである。このように不安感と活動性が共存する状態は、不安が行動を回避させるという一般的な想定とは食い違うものである。なお、SDSで測定された抑うつ傾向とPP特性は中～低程度の負の関係であった。この抑うつ傾向は外向性(Big FiveのE)、一般的な自己効力ともそれぞれ中程度に負の関係を示しており、抑うつ感が高ければ活動性が低下しやすいという状態はうかがえる。PP特性と就職不安、またPP特性と自己効力との間の結果から、女子大学生の就職不安は、一概に行動を回避させ活動性を低下させるものとは言えず、特異な要素を持つ可能性がある。

(2) プロアクティブパーソナリティと、成長不安・抑制不安

I-1では、大学生の不安、また女子大学生の不安が高いという点を述べた。数値的な高さとともに、この青年期の不安には成人と比べ質的な相違はあるのだろうか。山本(1992)は、青年期人格形成に関する諸研究が不安の“ポジティブ”な面にも着目して重要視していることを指摘し、青年期の不安が人間的な成長を促すような側面をも持つという捉え方を支持している。そして、従来イメージされがちな不安に近いネガティブな不

Table 2 日本版PPSと6つの尺度の平均値、標準偏差、および相関係数

	M	S.D.	日本版 PPS
日本版 PPS	63.0	12.86	-
GSES	6.7	4.02	.53**
CDMSE	76.4	15.21	.55**
SDS	42.2	8.00	-.34**
EAS	49.4	19.91	-.19**
成長不安	73.0	11.48	.46**
抑制不安	49.1	15.23	-.32**

**p<.001

安を「抑制不安」、青年期に特有な不安心性を「成長不安」と名付けた。両不安の特質を検討したところ、成長不安は人生の意味や人格的成長を創造、探究するような生き方と態度に強く関係するのだが、抑制不安はその様な生き方や態度を阻害されている状況にあること、自我同一性達成への指向性が低いことがわかった。青年期不安心性がポジティブ、ネガティブな2つの側面を持つという点が確認されたといえる。高校から大学にかけて両不安の変動を見ると、成長不安は大学1年までに大きく上昇し、その後若干低減しつつ高さが維持される。一方抑制不安は時期的に性差を示しながらも年次的な変動は少ない。山本（1992）は、青年期の成長不安増大について、大学入試や進路選択など青年にとっての重大事が成長欲求や不安感を刺激する可能性があること、また抑制不安については、その変動の少なさから個人規定的でやや病理的性質を反映するのではないかと考察している。なお、抑制不安は神経症水準にあると思われる臨床群と、適応群（一般高校生）との比較において臨床群が有意に高いことも把握されている（同じく山本，1992）。以上のような両不安の差異は、青年の“不安”状態が一様ではなく、その内容によって前進もしくは

は停滞という異なった態度や行動を招く可能性を示している。

先に述べたように、PP特性の特徴として活動性に不安感を伴っていることが想定されたが、青年期女子では、PP特性と成長不安が何らかの関係をもつのではないかと考えられた。女子大学生を対象にPP特性と成長不安・抑制不安の関係を検討したところ（西山・高橋，2003）、PP特性は成長不安と正の、抑制不安とは負の関係にあることがわかった。つまり、青年期においては理想指向や自己探求に関連して発生する成長不安が行動の動機となっている場合もあり、高いPP特性は積極性や活動性の反面、成長不安のように前に駆り立てられるような不安を併存してしまうということになる。ただし、抑制不安との負の関係をふまえると、行動する前に臆したり困惑して引きこもる状態や、神経症的な不安状態には陥りにくいということになるだろう。大学生4学年の推移について見ると、西山・高橋（2003）の調査データでは成長不安は学年による差があり、3年生がやや高く4年生がかなり低くなった。抑制不安では学年差は認められず変動が少なかった（Table 3, Fig 2）。山本（1992）の女子大学生のデータと比較すると、成長不安、抑制不安と

Table 3 4学年ごとの記述的データおよび分散分析と多重比較の結果（西山・高橋，2003）

		全体	1 年	2 年	3 年	4 年	<i>F</i> 値 <i>df</i> = 3/473	多重比較 (5 %水準)
成長不安	<i>M</i>	72.63	72.95	72.18	75.00	65.80	4.32*	2 年 < 3 年
	<i>SD</i>	11.77	11.74	11.68	10.77	14.86		4 年 < 1, 2, 3 年
抑制不安	<i>M</i>	49.28	50.47	49.21	48.63	50.00	.22 n.s.	
	<i>SD</i>	15.08	14.62	15.58	14.36	14.13		
<i>N</i>		477	62	281	111	23		

*p<.01

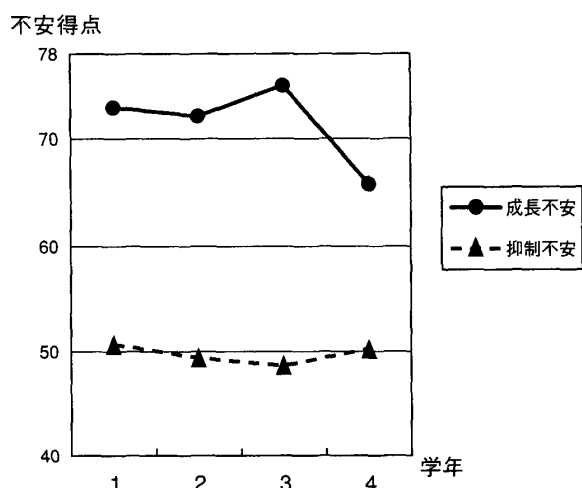


Fig. 2 成長不安と抑制不安の学年による推移
(西山・高橋, 2003)

も学年による変動は様相が異なっていた。また、抑制不安は西山・高橋 (2003) の方が全学年において得点で10程度高いという結果であった。西山・高橋 (2003) では1年生および4年生のサンプル数が少ないため学年差を比較するには早計である。しかし、調査に約10年の経過があること、1年間の中での調査時期の違いなどがそれ以上に影響したと考えるのが適切であろう。学生を取りまく社会的情勢の変化、また大学生活1年間の中での季節的環境の変化は、その時々的大学生の心理的環境に大きく影響する要素ではないかと考えられる。

Ⅲ 青年期女子の適応を保護する 個人的資質とは

前段では個人的特性傾向として一般的な自己効力とPP特性を取りあげ、先行研究の結果からこれらの特性傾向が青年期女子に寄与できると思われる知見を述べた。結論として精神的な適応を保つためにはどのような資質

がより望まれるのか、一青年期女子の状態像という視点から捉えなおしてみようと思う。

1つには「積極性、活動性」、かつそれが「主体的で能動的であること」である。環境からの刺激や要請に、それに対する反応として行動するのでなく、チャンスをついて出来るだけ先に働きかける積極性ということになる。それは、環境からの圧迫に負けにくく、現在の状況に甘んじないで変化を画策できる資質である。対象の領域は異なるが、就労者においてはBig FiveのE (外向性) とC (誠実性) は、組織の中で一方的な要請に負けずに能力を発揮し活動的に過ごしていくタイプの指標となっており、Bateman & Crant (1993) でPP特性との関連が検討されたのはそのことによっている。

第2には「行動に自信が持てること」である。これから自分がかかってくることにについて、成功の見通しを高く持てる状態が大切である。更にいえば、個々の事態や課題に対する自信、効力感も重要であるが、より広汎な影響をもつ一般的な効力感が高いことである。何故ならば、後者の場合には、日常一般に起こりうる多様な事態にも対応していけるであろう、という潜在的力を想定することが出来るからである。

第3にあげるのは「行動への取りかかりやすさ」である。必要を感じた時に、その行動を発現しやすい傾向である。上述第1点の「能動性」と重複する側面があるが、ためらったり迷ったりという躊躇が少なく、まず取りかかってみるという気軽さは、得られる結果の数を増やし、さらに、次に起こりうるチャンスの数を増すことになる。実はこの点はPP特性の長所の1つであるが、青年期の

場合、その背景には成長不安に左右される“前に駆り立てられるような”心境が存在する可能性があることがわかった。つまり、不安に駆られ、一種、衝動的な行動をとる危険もはらんでいることになる。行動発現のしやすさ自体は望ましい点であるが、青年期では気軽さと衝動性の両方をはらむ可能性があるということを考慮しておく必要がある。

Ⅳ まとめと課題

青年期女子の不適応状態として、本稿では特に不安心性に注目し考察を進めた。青年期の不安感を論じる中で再確認されたのは、いわゆる“不安が高い”という状態について、その数値的な高さだけに抑らず様相を質的に分析し理解する必要性があるということである。

青年期に特徴的と考えられるポジティブ・ネガティブ不安という2つの側面は、まさにその視点である。成長不安は、青年の発達過程において存在して致し方ない不安といえる。その不安を抱きつつも、改めて自己の存在の意味を探究したり人間的な成長を図ろうと試行錯誤する。しかし、一般に想定されるネガティブな不安に近い抑制不安は、心配や恐怖、自信の欠如を背景として生活への消極的な態度や行動の抑制を招いてしまうものである。学年が進むにつれ、「(卒業や就職を考えると)不安でしかたがない」という訴えはとてもよく聞かれる。この場合でも、当の青年が抱えている不安が、活動への不満足感に近いのか行動に臆する弱気に近いのか等といった質的な把握をすることが重要であり、その後のアプローチの選択を適切なものにす

ると考えられる。

最後に、日本における青年期女子の精神的適応を考察する場合に、今後の課題として加味したい点を述べる。それは、協調性という点である。日本の文化的背景として、好ましい人間関係のためには他者への配慮が重要視され、競争的対立的関係はあまり奨励されない。日本版 PPS の作成過程では、PP 特性は Big Five の A (調和性) と 2 度の調査に渡って低い相関関係を示したが、これは米人サンプルでは従来認められない結果であった。青年期女子では、自己意識の確立において他者の眼に敏感となるという指摘はされてきており (e.g., 梶田, 1988), 周囲に印象良く受け入れられたいという被受容欲求は男子よりも強いと言われている。精神的に安定した生活を送る上で、周囲とうまく協調し関係を築いていくことが、女子にとっては非常に大切な課題に感じられるであろう。青年期特有の姿勢として自分らしさを追究し自分の意志を尊重しようとした場合、この協調性という気づかいは時に葛藤を招くものと思われる。日本版 PPS から得られた結果は、協調や調和の指向が青年期女子における特質であるのか、日本の文化的社会的背景からの影響もあるのかがまだ解明されておらず今後の課題である。しかし、青年期における適応を考察する場合に、この協調性の問題はかなり重要な要素となるのではないかと考えられるのである。

注1) career には「キャリア」「職業」「進路」といくつかの訳語があるが、「一生を通じて行う仕事の準備、選択、開始、適応」と

いう Super (1953, 1990) の「キャリア発達」の定義を踏まえると「キャリア」がより包括的な表記であると判断される。

本研究の一部は平成15年度北海道浅井学園大学特別研究費の助成を受けた。

References :

- 阿部満州・高石昇 1968 顕在性不安検査 (MAS) 使用手引き 三京房
- Bateman, T. S., & Crant, J. M. 1993 The proactive component of organizational behavior : A measure and correlates. *Journal of organizational Behavior*, **14**, 103-118.
- 藤井義久 1998 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**, 441-448.
- 藤井義久 1999 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究, **70**, 417-420.
- Hackett, G., & Betz, N. E. 1981 A self-efficacy approach to the career development of woman. *Journal of Vocational Behavior*, **18**, 326-339.
- 伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度－大学生の職業経歴選択を中心に－教育心理学研究, **28**, 67-71.
- 伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究, **31**, 146-151.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 東京大学出版
- Matui, T., & Onglatco, M. 1992 Career orientedness of motivation to enter the university among Japanese high school girls : A pass analysis. *Journal of Vocational Behavior*, **40**, 351-363.
- 中里克治・水口公信 1982 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成 心身医学, **22**, 107-178.
- Nakazato, K. & Shimonaka, Y. 1989 The Japanese State-Trait Anxiety Inventory : Age and sex differences. *Perceptual and Motor Skills*, **69**, 611-617.
- 中里克治・下仲淳子 1989 成人前期から老年期にいたる不安の年齢変化 教育心理学研究, **37**, 172-178.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀 1995 特性的自己効力感 尺度の検討－生涯発達の利用の可能性を探る－ 教育心理学研究, **43**, 306-314.
- Newman, B. M. & Newman, P.R. 1984 *Development Through Life*. 3rd ed. Rechar d D. Irwin, Inc. (福富護訳 1988 新版生涯発達心理学－エリクソンによる人間の一生とその可能性－川島書店)
- 西山薫 2003 就職不安とプロアクティヴパーソナリティ特性および自己効力に関する研究 人間福祉研究, **6**, 137-148.
- 西山薫・中野敬子 2002 プロアクティヴパーソナリティと自己効力に関する研究－日本人女子大学生を対象として－ 学生相談研究, **23**, 176-184.
- 西山薫・高橋憲男 2003 プロアクティヴパーソナリティ特性の、日本版尺度開発と特徴分析に関する研究－女子大学生における自己効力および不安との関係－ 北海道心理学研究, **26**, 49. (北海道心理学会第

50回大会発表抄録)

大村政雄 1985 テーラー不安スケール 精神科 Mook **No. 10**, 99-107, 金原書店

坂野雄二・東條光彦 1986 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究, **12**, 73-82.

Super, D. E. 1953 A theory of vocational development. *American Psychologist*, **8**, 185-190.

Super, D. E. 1990 A life-span, life-space approach to career development. In D. Brown, L. Brooks, and Associates, *Career choice and development* (p 197-261). San Francisco : Jossey-Bass.

遠山尚孝・末広晃二・新里里春 1980 状態不安ならびに特性不安に関する研究⁽²⁾臨床群における検討 第44回日本心理学会大会発表論文集, p 654.

山本誠一 1992 青年期における不安の二側面に関する実証的検討 心理学研究, **63**, 8-15.

Sustaining Factors for Adaptation among Young Women: The Power of Self-Efficacy and Proactive Personality to Meet Anxiety in Adolescence

Kaoru NISHIYAMA

ABSTRACT

The purpose of this article is to investigate the personal factors among young women, which could sustain their adaptation. First, the difficulties during adolescence especially for young women are illustrated: the diverse decision-making process for their career choice and the formation of gender-identity seem to cause anxiety in adolescence.

Next, relations of the anxiety in adolescence and two personal traits are explored. One of those traits is “general self-efficacy” as a cognitive trait, and the other is “proactive personality” as a personality trait. Based on the findings, the effective factors or resources for sustaining adaptation among young women are implicated as follows: (1) being “foractive” or “proactive” (not passive) to effect environmental change, (2) having a confidence (efficacy beliefs) in their own behavior, (3) taking action easily.

Key words : anxiety, adolescence, proactive personality, general self-efficacy